

東巴歌舞と葬儀古俗 —宝山教派を中心に—

桑徳諾瓦[※]

近年来、中国と外国の学者たちは納西族東巴文化に関する研究をまさに進めつつある。研究の内容や方式が非常に豊富多彩で日本の学者だけの探究でもすでに盛大な成果を収めた。

ところが他の学科の研究に較べてみると東巴芸術（即ち、絵画、舞踊、音楽）に対する研究はいまだに全面的に展開されておらず、その中の東巴音楽（とりわけ、祭祀音楽）の研究だともっと極めて少なく、まるで空白の状態にあるようである。本章はえびでたいをつるのようにこの領域についていくらかの探究をする次第である。

東巴歌舞は東巴唱腔（歌い方）と東巴法事との二大部分を指す。本章に述べようとする歌というのは即ち東巴唱腔と言われるものである。のちに第一部分に紹介する“阿力主”等はそれである。“舞”というのは即ち神に扮装し、踊りをおどって鬼を追い立てる舞踊である。第二部分に検討する“哦熱熱”がそうである。

東巴唱腔（歌い方）は東巴文化の有声部分に属し、祭司が唱える《東巴經》の音楽系統である。それは普通東巴により、独唱及び合唱の方式で法事に合わせ道場にて行われる。歌う際、いつも小鼓や小銅鐸をたたきあわせる音を合図に（鐸鼓点とも称す）、歌のテンポを掌握する。東巴儀礼^①の際に唱える歌の働きは二つである。一つは儀礼式の雰囲気盛り上げる。もう一つはいくらかの民俗特性を添加する。もちろん、音楽を教えようとする功利の目的もある。

厳格に言えば葬儀歌舞という芸術形式が東巴祭司に独占されるものではない。今日に至って“哦熱々”“哭腔調”などの歌舞形式が納西族民間でまだ幅広く流行している。そのうえ、だんだん大昔の葬儀習俗に専ら行われる特定の民俗から分離され、“夕独熱”“撫布熱”などの“変形”が表われてきた。

本章において二十世紀五十年代を時間の下限として、内容と主題を論じようとする。

東巴唱腔は主に納西族民間の伝統的古歌^②、と山歌民謡^③から生まれ、若干の唱腔はチベット族のラマ教經典の唱え方から、あとの一部分は原始祭祀や咒語^④などの長期間にわたる吟詠により変化してきたのである^⑤。

東巴唱腔は種類が多く、その歌詞と、祭祀儀式での役目により、おおむね祭祀、葬儀、災難除け及び叙事という四大種類に分別される^⑥。音楽形式においては白地、永寧、魯甸、白沙、汝南および宝山などの派別が存在している。本章はその中の宝山教派を対象に研究し、宝山教派唱腔の中の一歩代表的な意義のある葬儀類歌、舞曲^⑦に重点をおいて述べたいと思う。

※ 中国・中央音乐学院研究生部碩士研究生

宝山教派は東巴七大教系^⑨における納西支系の中の四大教派の一つである。その流布地域は今の朋江宝山、奉可、鳴音、大東、大具あたりである。宝山教派は東巴教各支系（派）においては人数がわりあいに多く、勢力も大きく、影響力も広い東巴教派である。この教派の東巴がほとんど唄、踊、絵、吟何れもすぐれている。

宝山教派の東巴唱腔はおおかた自然で古くて素朴であり、メロディーはおだやかでテンポははっきりしていて歌いやすい、などの特長がある。とりわけ葬儀古俗に伴い生じた多くの唱腔（歌い方）及び歌舞は濃厚的な地方的特色を持っている。

当地の納西族人の葬儀古俗は独特で繁雑である。かれらは昔決められた儀式と規程をまじめに厳守する。この規程は忠実に《東巴經》に記載されており、そのうえ、規程の各段階も經典に記載されている内容規定にもとづいて厳格に行われている。

一、葬儀における唱腔

納西族古來の葬儀習俗では死者を埋葬して一定の時間を経てからあらためて棺を掘り出し、死体を火葬する。その理由は納西人がふつう一種の潜在意識—靈魂不滅を持っているわけである。血と肉からなる人間の体は人世間に所有されるため、死体が腐ってからあらためて正式にそれを埋葬することによって死者の靈魂が祖先の居住したところに帰ることができ、そして最終には鬼魂世界に入ることができる。

宝山教派の流布地域において葬儀古俗はふつう開喪（葬儀式）と超度との二大部分に分かれる。開喪部分は落氣、吊喪、出殯の三つの段階からなる。超度部分は七月封日、火葬、濟度、結びという四つの段階で構成される。葬送儀式的順序はすべて東巴祭司によっていろんな經典とそれに相応する唱腔に基いてきまり通りに進められる。いま、その順序をつぎの表で紹介する¹⁰。

第一部分 開喪

表-A

段階	規程	主要内容	東巴經書及び唱腔
落 氣	口に物を をいれる	①銜えるもの用意(米, 茶, 小金銀物) ②銜えるものを(白い紙で包んでお箸で挟む) 死者の口に入れる ③死者の手と足を平らに安置する ④隣りの友人や親戚へ知らせる	《阿黎主》
	水を買って 死体を洗う	①お金を水の中に入れる(外の流れる水) ②漆器の茶碗で水を汲む ③花草を一根茶碗に入れる ④その花草で死者の体をもみながら洗う ⑤死者の体全体に酥油を塗る	
	喪服を着せる	①死者に喪服を着せる(男女様式が異なる) ②死者の五官に酥油を塞ぐ	
	ト書を読んで もらう	①ト書を読んでもらう ②夜に逃げる(三日間) ③返った後孝男, 孝女が哭祭(喪歌を唄う)	
	食物を供える	①祭のご飯を供える(米, たまご, 箸) ②各種の果物を供える	
	生き物を捧げ る	①東巴に祖宗三代, 五つのかまどの神を祭ってもらう ②東巴に法事をやってもらう(経を読んで鬼を追い立てる) ③ぶたや鶏など供える	《獻生品》《猛厄緒》 《鶏の由来》
	熟するものを 捧げる	①燈火を点す ②ご飯, 鶏, 鴨, 魚, 肉を供える ③東巴に經典を読んで福を祈願してもらう ④孝男, 孝女が酒を味わって祭詞を読む	《燃燈經》 《求福祭》
入棺	①棺を玄関の外に安置する(頭東に足西に) ②棺の蓋にかまどの灰を掛ける ③棺を釘づけにする(封棺)	《死の門を閉じる》 《脱罪》	
喪 を 弔 う	口の是非を 取り除く	①線香を靈柩前の机に挿す ②蕎を木の鉢に入れて靈柩の上に置く ③“奪鬼”を送る雌鶏を竹の籠に閉じ込めて靈柩前に置く ④東巴に経を読んで鬼を追いたたてってもらう	《口の是非とかたき鬼の由来》 《鶏の由来》 《奪鬼の門を閉じる》
	牝牲羊を 殺す	①靈柩前に松枝を一本立てその上に白い麻の袋をかける ②羊で靈柩を祭る ③東巴が經典を読む(牝牲品の穢気を取除く) ④孝男, 孝女が麻布を被せて喪に服し, 酒をもって客を感謝する	《獻牲經》

“哦熱々”を踊る（一）	多くは興に乗って唄う。主題は死者生前の功績を称えるもので、かれを祖先の居住地に見送る（鬼を追い立てる意味もある）	《哦熱々》
亡霊を呼び出す（一）	①嫁に行った実の娘が哭祭 ②手で一つの銅盆の水を霊柩前に置く（死者の顔、足をきれいに洗うことを示す） ③羊肉のスープを捧げる	
病気を癒す	①五色の絹帯また牛羊のミルクと水薬を入れているヒョウタンを机の上に置く ②東巴が絹帯を持って、霊柩の前で経を読む ③柏の枝を一本ヒョウタンの水薬に浸し、それから棺の頭から後までそれをたらし、死者の体に附する鬼魔を除き去る	《拖須の由來》 《長寿薬の由來》
孝女の祭り	徐多が祭ってある各種の食物を一つの碗に入れ、棺をめぐるきながら、それを撒く、孝女がその後について哭祭。	
犠牲の牛を祭り捧げる	①東巴が経を読んで、犠牲品を殺す原因を述べる。 ②孝子が斧で牛を殺す。 ③孝子は一人ごとに分配された牛の腎臓でスープを作り、霊柩前に供える。	
親族の祭り	①みんなで霊柩に向けて三回頭を地につける ②みんな松をもって酒を飲む。 ③東巴が法事を行う（四女神に威霊を賜ってもらう）	
燈火をともし	①東巴が《燃燈經》を唱える。 ②孝子は孝女が捧げてきた明燈を受け取って霊柩の机に供える。	《燃燈經》
求福澤	①東巴が《求福泰》経を読む ②酒の碗に浸してある青い柏樹の枝を孝子（長男）の喪帽子に挿す	《求福澤》
亡霊を呼びもどす	①大、小東巴と一緒に経典を読む ②亡霊に魂を送る。 ③東巴は法事を行うことにより口の是非の鬼を追い立てる。	《窩子》（上中下巻） 《猛厄緒》《賜福澤》 《高勒招魂》
夕飯を供える	①晩は、死者の家属は煮た犠牲品の肉を夕飯として死者に供える。 ②死者の家属はきたないものを取り除く儀式を行う。 ③東巴が棺のまわりで踊りを踊って鬼を追い立てる。	

	晩のお菓子を供える	①徐多はいろいろなお菓子やあめが入れている碗を供える。 ②東巴は死者に晩のお菓子を供える儀式を司会する。 ③東巴が《供点心》経を唱える。	《孟子窩汝》(上中巻) 《供点心》(お菓子を供える)
	“哦熱々”を踊る(二)	①東巴が段取りして、そして音頭を取る。 ②死者の八卦, 五行, 位及び世を去った時の干支を唄う。 (また死者のために行った儀式の規程も唄って答える)	
	亡霊を呼び覚ます(二)	①孝男, 孝女は当日の夜, 焚きびを囲んで坐ってまち明かし, 翌朝, 鶏が鳴いたら鼓を三つ叩く ②孝男, 孝女は喪歌を唄う。 ③亡霊に鶏のスープを供える。遠くへ旅する前に滋養分を補うの意。	
出 殯	罪悪を取り除く	①《神路図》の掛軸を開いて棺の頭から玄関まで敷く。 ②東巴は《神路図経》と《勸奏支》経を読む。 ③羊を殺して火葬場に通る道両側の罪悪鬼を祭る。 ④孝男, 孝女は東巴に《賜福泰》経を読んでもらう。	《神路図経》 《勸奏支》 《賜福澤》
	生死訣別	①東巴は《安輔余子命》経を読む ②孝男の額に母屋のかまどの灰で“十”文字を描く ③孝男は靈柩をめぐって三回廻る。	《安輔余子命》
	霊を發する	①徐多は霊を發する“弔詞”朗読する。 ②棺を担いで玄関を出る。 ③東巴は経を読む。	《死の門を閉じる》 《推脱罪悪》(罪を逃れる) 《送鬼調》 《哭腔調》
	埋葬	①埋葬するため準備する。 ②埋葬。 ③東巴は死者の家族から送られた食物でその祖先を祭る。 ④当日の晩, 東巴は法事を行って鬼を追い立てる。	《奏子命》 《超存死者》
	夜逃	①死者の家属はみな親族の家に下宿する。 ②翌日の朝, 自分の家へもどる。	

第二部分 超度

表-B

段階	規程	主要内容	東巴經書と唱腔
七月封日に用意	亡霊を家に呼びもどす	①孝子は徐多と一緒に墓地に行つて魂を招く儀式を行う。 ②木炭を一つ拾つてそれを清い水のある茶碗に入れて亡霊を招いたことを示す。家に持ちかえて毎日祭る。	
	司祭の東巴を招く	①孝子は黄、白酒や麦、米などを背負つて東巴を招きに行く。 ②象徴的儀式（孝子と東巴は招きの理由を話しあう。） ③東巴が吉日を推測する。	
火葬	屍体を火葬する経過	①火葬する前日に火葬用の薪を用意する。 ②墓を掘りあけて、棺と屍体を取り出し、薪の上に乗せる。 ③孝子は棺を開けて敷くいてあつたモーブを取り出してから薪を燃やす。 ④焚きおえて骨の灰を捨てて家に帰る。	《超存死者》
超度	超度の鉢をつくる	①水で超度に使う三角の鉢形を作る。 ②鉢の位置を決める。（家の中に）	
	督の木をつくる	①松の木を切る。 ②木の上に黒い三角の旗を挿す。	
	亡霊のマントを作る	①羊毛（白色）と竹でマントを作る。 ②東巴に法事を行つてもらふ。 ③マントを四方に持ちあげる。	《燃天香》 《斯排吉共》
	身替りのマントを作る	死者の亡霊のかわりにマントを坐っている人形の形に作る。	《拖須の由來》 《材回生薬を搜す》
	犠牲の豚をささげる	①豚を殺して、その頭を身替わりに向ける。 ②豚の頭を切り落としそれを二つに切り分ける ③豚の腎臓でスープを作つて身替わりに供える。	《吉共儀式に犠牲の豚をささげる》 《犠牲の豚を解剖する規程》
	孝女の祭り	①勾巴（舞踊東巴）に法事を行つてもらふ。 ②かまどのそばで身替わりのマントに弔詞を読む。	《祭之調》
	亡霊をさがす	①東巴は法事を行っているんな生物を模倣する踊りを踊る。 ②東巴は《燃灯》経を唄う。 ③孝女が福澤酒を飲む。	紅虎舞、青龍舞、獅子舞、白鶴舞、白鹿舞 《活きる牲品を祭る》 《求福澤》
	皮房をこわす	①東巴は経を読んで、法事で鬼を追い立てる。 ②除穢、翌朝孝女が哭きながら哀歌を唄う。	《皮房をこわす》

身替わりの木を切る	①孝子は火葬場の沱国内の山に行つて身替わりの木を切る、等 ②戻ってくる時、親族はみなお菓子を持って途中に出迎えに行く。	対 巽 潤 巽
東巴が踊る時に裝飾するもの	①超度の家属は馬を二匹用意する。(一匹は主祭の東巴に乗せる。一匹は物をはこぶ) ②東巴は法事を行う。 ③主祭の東巴の家属は<除支>経を唱える。	<焼天香> <東巴に服装、法の杖等をやる由來>
祭壇を設置する	①塑像を安置し、線香を挿し、灯りをともし、優麻に幢を描いてもらう。 ②仏堂の囲りを飾り、黄、白酒とでく人形を配置する。	
主祭東巴を出迎える	①主祭東巴が出場する(勾巴群はみな假面を被つて、各種の法器を手にする。) ②下東巴たちは<請求主祭東巴>経を口誦する ③主祭東巴は道場を行う。 ④東巴が<説死者出靈的名字>を口誦しながら黒い酒碗とかまどの灰の塊りをうち砕く。	<丹意経><丹布則> <育空社><解除口舌是非> <羊毛披毡的來歴> <白酒、黄酒黒酒、的由來>等
身替わりの木を作る	①主祭東巴が<巫子、育子>経を口誦する。 ②東巴は法要を行つて<巫本巫意斯>経を口誦する。 ③象徴的に鬼を射する儀式を行う。	<菓水的來歴><送奪鬼><讓奪鬼享用牝牲品>等
骨の灰を取り戻す	①孝子は、焼き残した頭蓋骨を取つて麻布に乗せて五方に持ちあげて招魂を示す。 ②鶏を残して門神にささげ、亡霊を迎える。	<古窩古左更> <空必>
身替わりの木の家を作る	①孝子は、供えの机をしつらえる。 ②主祭東巴は法要を行う。(鶴、鷹、虎、豹等の踊りを踊る)	<沙置沖巴近> <里撒松> <特与正>
牝牲の牛馬羊を洗つて獻げる	①供えの机に小神壇を設置する。 ②東巴は法要を行いながら<澤吉育吉院吉>経を口誦する。 ③主祭東巴は音頭をとり、みんなで“哦熱々”を踊る。 それから、<跳“哦熱々”舞的來歴>経	<燃燈><孟帖> <史崩里務><寮搬図><窩子><上中、下三卷>等
賢人を超度する	①主祭東巴はみんな踊り始めてから、神壇の前で<孟士窩汝>(上、中、下卷)経を口誦する。 ②法要を行い、<岩菊特古除青>経と<超度賢能者>経を口誦する。	<搭神壇><優麻紹><分虎皮><虎的來歴> <求福澤>等
亡霊と別れをする	①孝子は早朝鶏が鳴いた時に“哭哀歌”を唄つて亡霊を呼び覚ます。 ②孝子の額に“十”文字を書く(霊を発する時と同様) ③東巴は経を口誦し、法要を行う。 ④再び<神路図>を敷く。	<古更崩伍扑><生死訣別><燃天香> <優麻戦神的來歴>
結		

結	亡霊を見送る	①東巴は《普米肯普米吐》経を口誦する。 ②身替わりの木で祖宗の牌位を継承する。 ③身替わりの木にあめの水で煮たたまごを供え遠くへ出かける亡霊の疲れを取る。	《巫中巫奪位》《再拉公勾拉》《崇拜素日落》《盤其納其共》《米克鋪》《送魂調》
び	身替わりの木を寄ける	①主祭東巴が《折替身木房》経を口誦する。 ②法要を行い道を導く。亡霊がすでに正式に祖先になったことを示す。 ③超度をする家族は東巴を見送る。	《閻死門》《推脱送錯》《祭祖先》《送回渚神・折神壇》

本章において単に全葬儀の中でもっとも特色のある唱腔について五線譜をもって解説したい。

例1：《阿力主》¹¹

1. 今晚 上， 大叔 去世了，
2. 把你 送， 我们 把你 送。

この種類の歌は通常落気段階に親族や友人は死亡通知を聞いたら死者の家族と一緒に合唱する。このような歌はふつう地域の差異により濃厚な地方色彩を帯びる。上記の歌にはチベット族民歌の調子の特徴がいくらか見られる。民間口碑の伝承によれば、この歌は川一つを隔てた中甸三坝あたりから伝来されたものだという。歌詞の大体の意味は“××が亡くなった。われわれはあなたを見送りに来た。”唄う時にテンポが緩慢で情緒も低く沈んでいる。この種類の葬礼儀式の歌は普通年上の人が世を去った際、唱えられる。一方、年下の人や非正常死亡者¹²の葬礼の儀式には通常純粹の哭腔（泣き声）で自分の懐しさを表現する。これは文献にも記載されている。

“---人が死ねば竹籠にて山の麓に埋めこみ、棺なし、貴い者、賤い者言とわず皆同じ場にて焚き、骨も納めず、横死したものは別の場にて焚く。”

このほか、東巴経には葬儀に関する経典とそれに相応する唱腔が多く、その使い方も厳しく規定されている。(即ち、死者の身分により別べつの経典と唱腔を利用すること)、詳細は次の表の通りである¹⁴。

第一部分 正常死亡者

表二 A

死亡対象	主要な經典及唱腔（唄い方）	經典大意	現在すでに整理
①一般人	<p> ≪人類遷行記≫≪木偶を削る≫≪神路を開く≫≪冥馬を献げる≫≪死者に弔の歌を送る≫≪陪葬の鶏を放つ≫≪死者を依多福地に送る≫≪離れるご飯を食べる≫≪勒馬聚鬼を追いたてる≫≪作物を栽培・収穫する≫≪天燈をかかげて、死者の行路を照らす≫≪俄英都奴の故事≫ </p>	<p> ①火葬習俗の由來を記載している ②死者を祭る完全な方法規程を記載している。 ③亡霊を超度する方法過程を記載している。 </p>	70余冊
②勝利者	<p> ≪勝利者を祭る≫≪勝利者の出処と來歴≫≪勝利者を出迎え、牝牛で牝牲を献げる≫≪勒馬聚鬼を追いつけて、九座黒坡を破る≫≪敵を捕える≫ </p>	主にその偉大な功績をたたえて後の世代を教育する。	15冊
③牧者	<p> ≪馬、牛、羊の放牧者を祭る≫≪燈をともし畜神を迎える≫≪牧者に飯を献げる≫≪牧者を祭り、死の門を閉じる≫≪牧者のために招魂する≫≪牧者米利董主、崇忍利恩、高勒趣の故事≫ ≪馬聚鬼を追いつけて、九座の魔関を破る≫ </p>	主に家畜を飼う経験と過程を教える。	7冊
④有能者	<p> ≪有能者を祭る≫≪賢男、賢女を祭る≫≪有能者の來歴≫≪武器の出処と來歴≫≪薬をさがし、薬をささげる≫ </p>	群に卓越する才能と熟練している腕前をたたえる。	5冊
⑤長寿者	<p> ≪男の長寿者を祭る≫≪女の長寿者を祭る≫≪米利董主、茨昭金姆のために燈をともし≫≪含依宝塔神樹の來歴≫ ≪錚増含魯美の來歴≫≪大鵬長寿島の由來≫ </p>	<p> その人が長寿の列に入ることをほめる。 その人の後の世代も長寿できることを祈る。 </p>	等16冊

⑥東巴	<p>《丁巴什澤伝略》《什澤祖師を迎える》《什澤の屍体を火葬する》《黒海で什澤のために招魂する》《法刀の來歴》《五云の鬼王を射る》《什澤が名前を変える》《什澤祖師を見送る》</p>	<p>教主丁巴，什澤の法力を發展させ，人びとの災難を免れる。 教主の規格に仿って儀式をあげる。</p>	<p>等 8 2 冊</p>
⑦東巴の妻	<p>《茨里拉姆伝略》《拉姆の魂を招く》《尼瓦地獄の血海をうち破る》《死者の結びをとく》《天燈の柱をたてる》《勒馬聚鬼を追い立てる》《火葬の儀式》</p>	<p>かのじょたちの靈魂を救うため，いろんな儀式を行う記載。</p>	<p>等 3 0 冊</p>
⑧跡嗣のない人	<p>《跡嗣のない人の來歴》《跡嗣のない人のために罪をあがなう》《跡嗣のない人に犠牲を献げる》《遺産を繼承する》《高勒趣とかれの四人の息子の故事》</p>	<p>その靈魂を祖先の居住地と33の福地に送る。</p>	
⑨若死にする者	<p>《先に死亡した者を祭る》《若死にする者を祭る》</p>		

第二部分 非正常死亡者

表二 B

死亡対象	主要な經典及唱腔（唄い方）	經典大意	現在すでに整理
有意識的に死亡した者	<p>《魯般魯繞》《首をつり死んだ人のつり糸を切る》《情死者のために冥房を作る》《神様を迎え，ご飯をささげる》《亡魂を招く》《情死者を樂園に送り込む》《毒鬼の負債を返済する》《阿薩咪を祭る》</p>	<p>風を祭る儀式を行う（とりわけ，情死者）</p>	<p>等 8 7 冊</p>
無意識的に死亡した者	<p>《短鬼の出と來歴》《犬をぶらさげて短鬼を鎮める》《白石と黒石をはっきり区別する》《朗久敬究神を出迎える》《死の結び目をとく》</p>	<p>短鬼を祭る儀式を行う。 その魂を福地に送り込む。</p>	<p>等 6 2 冊</p>

例二：《哭腔調》

(咳 噫) 阿妈(喂喂) 太阳 (咳) 着云 遮(啊) 还能 见得着
(喂 啊) 阿妈 (咳) 上下 埋咭 (啊) 见着(咳) 不得 了暗 (啊噫阿妈喂)

この種類の唱腔はよく出棺の際唱えられる。そのメロディーから分析すれば、唱腔が民間の《哭喪腔》からうつりかわったものであろう。唱える時、約高低大、小三度の誇大の顫音の運用により強烈な哀しみが更に強められ、人の涙を流せられる雰囲気を作りだす¹⁵。

例三：《超荐死者》

美丽的白云，层层白云，里面
白鹤随云去。白云是白鹤的家。白鹤
飞去了，白鹤不再来，白鹤不再回。小鹤小鹰们，
鹰跟鹤。鹤跟鹰送鹤到云间，到云间。

この種類の唱腔はふつう出棺の際、棺をおろす儀式がすんだあと、主祭東巴に唱えられる。人世間に返ったら親戚や家畜に災いを被らないように死者の靈魂を安定させるのが目的である。

例四：《祭文調》

云间鹤寿长，长者祖父喂，白鹤寿千岁，寿并非千岁，天鹅寿百
岁，可活百岁的，寿命不由己，痛心长随矣。

この種類の唱腔はほとんど口語化の傾向が強く、吟誦するようなものである。ふつう超度段階、孝女の祭りそなえる儀式に唱えられる。唱腔には多くは附点が付けてあって、歌詞も五文字の句を主とする。内容は主に死者の生前の追憶、評価及び死者の親族に対する慰めが多い。歌詞は擬人化の手法が多く使われ、経典を引用し、比喩表現がいきいきとしている。

例五：《送魂調》



この種類の唱腔は一般的に結びの段階に亡霊を送り出す儀式を行なう際に、主祭の東巴により唱えられる。歌詞は主に物を人にたとえ、よく似ていて、真に迫っている。東巴が魂を送るロードはみな西北方向であるこれは納西族の一部が商（殷）周時代前にわが国西北部の古代羌族の後裔であった史実に関係がある。学界では古代史に伝説された伏羲氏，神農氏，軒轅氏は，狩猟により生活しながら北方へ移住する羌族と，雑食しながら移住してきた華族が中原地区で触れあい，形成した三つの強大な氏族である¹⁶。史書には“伯禹夏后氏，姓姒で石紐生まれ---西羌にて長ず。”著名な学者徐中舒先生も“夏王朝の主要部族は羌であり，漢代から晋代にかけて五百年にもわたる長期間に伝説されている羌族説によれば夏が羌ではないというわけにはいけぬ。”と指摘している。学聖章太先もかれの《序種姓》に“爵禹みな濁江に興ず，嵩頁と同じ地である”。“中夏王迹，基は華山の間にあり。”“北は雍京に至り羌に属し，南は滇，黒水に至り，髦に属す。”と書かれている。こうしてみれば中国原始時代の“三皇五帝”の中の炎帝，黄帝，伏羲，専高頁と文明時代の夏，商，周，秦などの五朝の源はみな羌戒である。これらの歴史的痕跡は今の納西族文化芸術¹⁹，哲学観念²⁰，祭祀儀式²¹，風俗習慣²²などの方面に残されているばかりではなく葬儀習俗の東巴唱腔からみても往々にしてこの歴史文化のあとが反映している。

二，“哦熱々”についてのいくつかの考証

“哦熱々”（熱美蹉とも称する）は遠い古代にはもっぱら葬儀に鬼を追い立てる歌舞である。この種類の歌舞に関する内容経典が東巴経にも記載されている²³。《熱美蹉》のいわれ経》にはその起源をつぎのように書かれている。

〔原文〕

大 有 高 有 大
 大 有 高 有 大
 大 有 高 有 大
 大 有 高 有 大

大 有 高 有 大
 大 有 高 有 大
 大 有 高 有 大
 大 有 高 有 大

大 有 高 有 大
 大 有 高 有 大
 大 有 高 有 大

大 有 高 有 大
 大 有 高 有 大
 大 有 高 有 大
 大 有 高 有 大

〈詳文〉はるか昔、納西の神“梅生狭都塔”千年萬歳に生活している；山中の“蜀”（山神、龍神）族の“古魯古九”千年萬歳に生活している時、かれらは白鹿を射ち殺してしまった。白鹿の腹の糞に蛆が湧き、また蛆が360の白卵を生み、白卵が360の飛魔“熱美”を生んだ。当時は人類はどうして“木脾”（①屍体保存、②火葬、③土葬）をするかはまだ分からない。山谷の360の飛魔“熱美”がまっすぐ山もとへ飛びおりてきて、死者の血を吸い肉を食うと言いつらす。人びとはどう仕様もなく驚き恐れてばかりいる。死者の親族や隣近所の人がみんなそろって大声で叫けながら踊りを踊ってそれを追いたてるというただ一つの対策しかない。“鋪里建野舒木”（經典）に早くもこう書かれており、われわれに教えてくれた。

秋と冬には白卵が山の奥の林の柏樹と橡樹に孵化し、生まれ出る。あいつらのやり方には人びとがなんともしようがないし、理屈も通らない。

すると頭のいいひとたちは集まって対策を検討した結果、丁巴什澤（東巴教主）に魔法で解決してもらうことにしたのである。丁巴什澤がその話を聞いたら悲しむばかりでなく怒りこんでいる。金火、銀火を燃やし、360の飛魔“熱美”を焼死せよと命じた。しかし360の飛魔“熱美”が火の中で一種の精霊----“熱美鬼”に修煉してしまった。それから人間には“熱美鬼”が出現したのである。

その時から“人が死んだら熱美を踊り、熱美を踊ることは死者を送るためだ”という経が古來からの説である。

1. “哦熱々”の名称について検討してみよう。

“熱”というのは遠い古代の納西語において、神にも、鬼にも似ている、一種の精霊である。東巴經書にはそれを“𠄎”と書いて同時に善と悪の属性、そして男になったり、女になったりする性別を持っている。と注を入れてある。それに対する正しい解釈は“飛魔で人間に従えば善に主、生育の神であり、鬼に従えば凶に主、人間と家畜に崇る。²⁵ “善をすれば祈るべきであり、悪をすれば追い立てなければならないのである。

“哦”は感動助詞で朴助詞としては感動助詞“阿”と共通である。（交換できる）納西語では敬意と畏怖の意との二つの作用に使われる。現代納西語口語には“哦熱”がゆっくりの意だと解釈してある。前に述べたことからみれば“哦熱”はいまの掛け声に似ていると理解するわけにはいけない。“呼ル海呀”などのような村詞（村助詞）だと解釈してはならない。それは大昔の納西人が尊敬もしたり畏怖もしたりして、そのうえ尊敬すればこそ畏怖する神経である。

2. “哦熱熱”の唄い方と踊り方について述べて見よう。

“哦熱熱”の歌舞にはふつう全民族がごぞって参加する。（お葬式に他の分担を兼ねる者を除く）、まず一人の司会東巴に音頭をとってもらい、女声部は“羊咩”の声で男声部は“哦熱”の声で一定のテンポをもって東巴の音頭にあわせる。このように唄を繰り返して徹夜する。踊り者は時間の冗長、曲調の単一、舞踊の動作のいとけなく、つたないことにけっして倦きはしない。ぎゃくに主祭東巴の意味深く分かりやすく、すばらしい歌で祖先の移転と各種の儀式の由來を唱えるのを聞かせてもらえるためにみんなうれしくじっとしてられない。

“哦熱々”という歌舞を踊る際に男子の“哦熱”（歌詞）に対応するのは女子の“羊咩”（歌詞）である。後者はふつうの男声部の二番目の音位の $\frac{1}{2}$ のところに歌い込み、とぎれない“羊咩”の声が形成され、終了までに唄いつづける。（次の楽譜を参照）

（男声混唱、庄严、神秘地）

哦 热 热

（桑德清瓦根据录音记谱）

咳 喂 咳

哦 热 热 哦 热 热 哦 热 热

喂 喂 喂

哦 热 热 哦 热 热 示 示 示

実際に、鬼を追い立てることと民俗の神と一体に結合してできた歌舞には確実な意味の歌詞がない。始めから終わりまで始終男子のきっぱりした追い立ての声と女子の柔かい祈願の声だけである。そうするとなんのために追い立てるのか、またなぜ祈願するのか？

3. “哦熱々”歌の真の意味について簡単に考証してみたい。

追い立ての声は死亡に対する恐懼から由来し、祈願の声は祖先に対する尊敬のためである。上述の二つの心理は同時に外化的形式で有機的に“哦熱々”という歌舞に結びつけられたのだと筆者はそういうふう考えている。

まず追い立ての聲の由来を述べよう。

先に述べたように“哦熱”が悪に従えば凶が主、人間と家畜に崇る。それは前述した東巴に記されている“熱鬼”の由来による恐懼効果ではなくて、納西民族祖先が客観規律に対する認識の差異と当時の社会生産力の発展の低下によるのである。かりに想像すればはるか昔、原始人類の幼い時期の納西人の祖先がきびしくて奇異な生活環境の中で生存していた。とういう環境によってよくかれらに恐懼と神秘的感覚が造り出されてしまった。かれらは狂風の荒れ狂い、雷、洪水、強い風雪（嵐）山崩れ、地滑りなどのような自然現象に対し全く理解できない。生と死、明るい暗いの現象に関しては正しく解釈することはさらに無理だ。とくに人間の死亡には不思議に思われ、万物に靈がある恐懼の心理が現れた。かれらの認識は直接的な実践活動からしか得られない。今までに見た“山崩れ、地滑り、獣に噛かれたことにより人が死亡した”のようなごく簡単な現象だけを通じて、人間の死亡を連想する。“病気や老衰で人も死ぬ”という因果関係は理解に苦しむ。理解できるはずはないと言ってもいい。“火に焼かれて人が死んだ”とか“洪水に溺

死した”とか“獸に噛まれて人が死亡した”のようなことは自分の目でじかに見ることができるが“老衰で死亡”“病気で死亡”の過程には解釈できないので上述の現象の原因は“哦熱”という飛魔にあると信じて、恐懼心理が現れてしまったのである。こうしたことを前提にそのうえ東巴經典の相関する記載と東巴祭祀のさまざまな解説のために人びとは“哦熱”の存在をだんだんかたく信じるようになった。死者が喰われないように人が死亡した時に“哦熱”の追い立てによってその侵害を防ぐ。

女声部の祈願は“哦熱”は人に従えば善が主という面にある。それを“生育の神”と見なしている。これは二つの意味が反映される。一つは納西人祖先の昔の輪回觀念であり、もう一つは昔納西人祖先のトーテムの一部の痕跡である。

前に納西人の祖先の一部は古羌人がその源であることを述べたが《説文》には羌についてつきのように解釈している。“西部の牧羊人で人間に従い、羌に従い、声が羊に似る。このほか、それを“祥、美、笑”などと見なして説明することもある。段玉裁も“義はもとほ儀で---儀は、度で---羊に従う者は善、美と同じ意味である。”と注釈した。東巴經にもそれを多くのめでたい意味やことばに結びつける。これらのさまざまな言い方は当時祖先たちの生産関係に関連している。ご存知のように原始の語幹を形の符号とし、音声の符号と組み合わせてできた形声字はその主要な意味が形作る符号にある。東巴象形文字はこの点においてもっとも顕著である。だから女声部が羊の咩の音を模倣することは前に述べた納西人祖先の歴史背景と関係するのではないかと思う。なお、納西人祖先の生まれ生活のところ関係なく家畜の移動によって居住を変えるという原始游牧時代では“哦熱”が“生育の神”としてさらに重要な意義を持っている。生産力が極めてたちおくれた環境では生育と繁殖はいつも盛衰と存亡に係るためである。生は即ち死であり、死はある意味の再生である。このような生死輪回の觀念は根強く納西人の頭に染込んでいる。だから、こんなにたくさんの葬儀の經書が作られ、今日に至っても変わらない、靈魂を祖崇のところに送る葬式儀礼や順序が残されているわけである。

その二、“哦熱”が今日に至って一応納西語の中で“吉祥”の語意を帯びる符号となっている²⁶。“吉祥”を象徴する語意と符号は昔から伝わってきた習俗であり、簡単に変えられないものである。このような習俗の形成に次のような二つの原因がある。一つは歴史的な原因である。納西人の祖先がかつて長い狩獵と游牧生活を経て、毎日羊を放牧し、それを観察することによって最初のトーテム表象が形成されたのである²⁷。あらゆるトーテム集団が所有する地域と文化の特徴からみればトーテムはある程度その部族が生存する地理、自然環境、生産方式及び生活条件に緊密にかかわっている。そのうえにトーテムは切實的な經濟意義のある社会構造であると同時に原始的共同制が軍事的民主制へ移転する不可欠な産物である。以上に述べた意味をふまえて、“哦熱々”歌舞の羊咩の声は偶然的、好奇的な模倣からできたことではなく、納西人祖先の早期の羊のトーテムのめばえにかかわりがある。したがって納西人祖先が早期に羊のトーテムに対する崇拜は祖先たちが生存していた自然環境と生活条件により定められたものである。

なお、羊咩の声は納西人祖先の人種繁殖の概念に一定の関係がある。納西人祖先がほとんど女

性の妊娠は両性のけつごうによる結果ではなく祭祀儀式に“哦熱”歌舞に含まれるトーテムの繁殖意味の“同類相生”による結果だと考えている。つまり、葬式で唄われた“哦熱”を通じて、人びとは自らがトーテムとある血縁関係を持っていることを深く信じている。この假説は現在でも納西の女性の服飾にいくらか語られている。納西族の女性の服飾は必ず“羊の皮が一枚ある”わけである。それは吉祥の象徴とするとともに自らが属するトーテムを表すためである。さらに自分が妊娠する子供は羊（トーテム）の子孫だと思ひこんでいる。そのため、納西人は“羊”を“人生”と結びつけているわけである。現在は納西語では“善裕”の意味が“人生”であり、直訳すれば“人と綿羊”となっている。われわれは言葉が歴史の鏡であると言い、納西族東巴文化の中で羊が人間とのつきあう程度と羊に対する描写、記事はたくさん見られる。要するにトーテム部族のメンバは自分自身にトーテムの保護をうけさせるため、自分をトーテムと同化する習慣があり、あるいは、トーテム動物のけがわなどその他の部分を身につけることがある。----²⁸。“インディアン諸部族はトーテムのけがわを衣服に作る。”“マヤメーのテリ人は完全な狼の皮を衣服にし、頭が狼皮にあげた孔を通して、狼の頭を胸に、そのしっぽを後にぶらさげる³⁰。”その目的はトーテムの保護を求め、吉祥を図ることにあり、またそれを呪い物、あるいは装身具とすることにある。

統括的に言えば、ずっと昔に専ら葬式儀式に使われる“哦熱々”という歌舞曲は鬼を追い立てる効能ばかりではなく同時に新しい生命を祈願する功利の目的も持っている。この歌舞は男子の“哦熱”の声は実にある畏敬が恐懼と互に対応する心理外化の形式である一方、女子の“羊咩”の声は本民族のトーテムの“声音”のある模倣であると同時に死者の靈魂を本民族トーテムに転化させる願望もある。つまり人間の生死はみなトーテム“祖先”と関連しているわけである。

筆者が上述した結論は主に納西民俗（とりわけ葬儀習俗）、心理、伝説、宗教及びその他の“変数”項などによって究明したものであることをおしまいに説明したいのである。ある意味から見れば“哦熱々”という葬儀歌舞の内包は純粹の“追い立て”という概念をかなり超えている。なお納西人祖先のたくさんの精神と文化の港疇のすべてを包括する³¹。その伝承は大きな意味に於いては主に納西族民俗における葬儀式に頼るものである。

三、結語

納西族の葬儀歌舞は葬儀古俗の特点を表現するし、その思惟の特徴及び人間関係も反映する。そのため強い功利の目的を持っている。“口銜えものをやる”“水を買って屍体を洗う”“亡靈を呼びだす”などは実質に於いては主に死者の靈魂の回帰のために考慮したものである。その後の一切の手続きは例えば、“亡靈を呼びもどす”“亡靈を見つける”“亡靈を見送る”など巫術心理と靈魂不死の概念が納西社会の葬儀習俗に浸み込んだ結果である。こういうようなすべてのことはみな東巴唱腔（うたいかた）と唄われる經典を“外化”の形式として表われたのである。そのうえ、“哦熱々”の中でかぎりない発展できた。そのゆえに靈魂不死の概念は納西族の葬儀歌舞と葬儀習俗の中核であり、その葬式儀式の全過程に徹底している。

注 釈

① 西田龍雄，山田勝美の文字研究；伊藤清司，君島久子の神話研究；齊藤遷次郎の宗教研究；生明慶二の音楽研究；志村善多子の伝承研究と諏訪哲郎の総合研究等。詳しいことは白庚勝《日本の納西東巴文化研究について》（《東巴文化論集》雲南人民出版社1991. 3）を参考して下さい。

② たとえば“哦熱々”，“哦猛遷”等

③ たとえば“谷凄”“麗江小調”，“四喂々”等

④ “祭祖先”，“殺妖”等

⑤ “唱神燈”，“什澤燃神灯”等

⑥ 祭祀類の唱腔は東巴唱腔の主要な部分で大体は納西人の祖先が天地を祭る“祭天古歌”，祖先を祭る“祭祖”，山川を祭る“祭山神”及び“祭龍王”“祭酒歌”“祝婚歌”などで構成される。葬式類の詳しいことは本文を参考にしよう。

叙事類の唱腔は《東巴經》の伝承と唱腔に於いてはきわめて重要な地位を占めている。この種類の唱腔はほとんど内容が宏大で巻数が多い創世史詩と民間長詩である。たとえば《魯般魯饌》など。

厄除け類の唱腔は主に人間と家畜の生存と発展を妨げることをとり除き，病氣と災難を免れるために行われる儀式に唄う。例えば，“什羅を招く”“優麻神を出迎える”等。

⑦ 納西族の葬礼儀式類の歌舞と楽曲はみな非常に豊富である。とくに儀式に密接に関連する“祭る調”“哭腔調”“送魂調”“軟歌”“超荐死者”等については本文はそれを第一部として解説する。歌舞曲においては“哦熱熱”が一番特色に富み，かつ頗る典型的である。だから本文はそれを第二部として考証する。一方葬式に使われる大型楽器曲《崩石細哩》もあり，また近年來，小さな都市の葬式に広く用いられる《麗江古樂》などもある。それに関しては別の文で紹介する。

⑧ 東巴教は納西語の異なることと各地の経済，文化発展の差異により，納西人達巴（この派別の經典はみな口誦經であり，教派は寧浪，監源，木里などに流布している。）納恒人哈巴（多くは納恒人が鬼を追い立て，神を踊り，災いや病気を免れる活動である。チベット文の經典がいくらかあり，寧浪と永勝に流布しているということである。）拉惹人達巴（文字で表わす經典がない。韓，田，揚，胡，羅という五姓達巴があるそうだが，主に木里あたりに流布している。）阮可人東巴（少量の“阮可”文字と經典がある。ほとんどは阮可人が祖先を祭り，開喪，および超荐儀式に使われる。）拉洛人東巴（流布地区は広いが文字經典は非常に少ない。）僅郎人東巴（經典があり，一般は拉洛語で經典を読む。そのほか，この派の流布地域には一部分の“桑尼”巫術師がそれと共存しているがそれぞれの職能を司る。）納西人東巴（上述した各支系においてはその流布が一番幅広く，地域人口が納西族全人口のやく六分の五を占めている。大量の象形文字と標音文字で書いた經典がある。東巴のほとんどは誦，唱，舞，画などにみな長じている。この教系はまた白沙，白地，太安魯甸，宝山という四大教派に分別される）など七つの教系に分けられる。（和志武，郭大烈《東巴教の派別と現状》（《東巴文化論集》雲南人民出版社1985. 6.）を参照する。

⑨ 四大教派は即ち中甸白地教派（この教派の唱腔はほとんどチベット族民間音楽の痕跡を帯びている。一部分は直接にチベット語で唄う。たとえば“燃燈”等）；宝山教派の特点是本文を参照しよう。白沙教派

の唱腔は大多数麗江納西山歌や民謡がその源である。たとえば“祭風経”，魯般魯錢”等）太安，魯甸兩派東巴の經典と部分の唱腔はお互いに受け継ぐ因素が存在しているが魯甸教派の唱腔は冗長な叙事詩がほとんどだからその特点を持っているわけである。

- ⑩ 筆者は東巴と即貴の陳述により《納西葬儀古俗》（《麗江文史資料》八，九輯）を整理してまとめて表を作る。
- ⑪ 納西語（歌名），“送別”とも称す。
- ⑫ 凶死を指す（自殺，溺死，焼死等）若死にする者，病気で死亡者。
- ⑬ 余慶遠《維西見聞録》を参照する。
- ⑭ 筆者は和發源の《東巴古籍の類別とその主題》により整理して表を作る。
- ⑮ 筆者の拙作《民俗の魂》（《中国音楽》1991. 3）を参照する。
- ⑯ 任乃強《羌族源流探索》（重慶出版社1984）
- ⑰⑱ 李紹明等の《羌族史》（四川民族出版社1984）から引用する。
- ⑲ 拙作《納西文化芸術と上古羌人文化の相似性》（《芸舟》1989. 1）
- ⑳ 李国文《東巴文化と納西哲学》（云南人民出版社1991. 3）；伍雄武等編纂した《納西族哲学思想史論集》（民族出版社1990. 12）を参照する。
- ㉑ 弋阿千主編の《祭天古歌》（中国民間文芸出版社1988）を参照する
- ㉒ 即ち順推時父子联名制，火葬，祭天，木石牌画等の民俗。
- ㉓ 象形文字で書いた東巴經典には“哦熱々”（即ち“熱美嗟”）に関する經典が四冊ある。《熱美嗟來歷經》（全文は本文を参照する）《熱美結果経》（上，中，下三卷），《友麻熱樹を切り倒す経》：《吊死鬼と熱美鬼は家産を分ける経》。
- ㉔ 和玉才が口誦し書いて，宣科が整理した《“熱美嗟”の來歴》（謄写版）を参照する。
- ㉕ 方国瑜《納西象形文字字譜》（雲南人民出版社1981）；李霖杹《麼些象形文字字典》（国立中央博物院專刊1945四川李芸謄写版）
- ㉖ 納西人は友人が遠くへ出かける際よく“阿熱布路”（ご無事に）と，宴を催しお客様を招く際には“阿熱子高莫”（ごゆっくり）とあいさつして，吉祥如意を表す。
- ㉗ トーテム表象は要するに原始人類の心理による作られた最初の形象である。
- ㉘ J. G. Frazer（《Totemism and Fxogaing》Vol. 1 P 25-26）
- ㉙⑩ 令家梧《トーテム芸術史》（P 43-43）
- ㉚ 拙作《納西族“哦熱々”のトーテム痕跡》（民族芸術研究》1989. 3）

〔追記〕

本文を執筆する際，終始多大の支持と何回ものご教諭をしてくださった指導教官田联稻先生に対し，よい勉強になったよるこびをこめながら，ここで深く謝意を申しのべる次第である。

（虞中心，筑波大学歴史・人類学系研究生記）